

秀と師兄の如く敵ひたるをも遠慮も他家より先に筒井を自方に属
 しゆんと今使者をりて徒徒てんとて使者に役せし太八郎種くに魏宿
 を出してのち使節を伸て言をす。齊當家自方とするよに徒徒領を
 和州へ易倫それがうへ紀伊和泉の二州城一圓相済らき。三箇國の主と
 らしゆん此義を會えかせられ速よ出京ましく万鶴軍勢政事等を
 技助しむる薦めゆにと言遣しむかうと恵く順慶心を悦喜し。此時
 家臣團士皆略集め。まづ使者太八郎を厚く賓客出京をき評議に追
 ふ。彦子筒井の謀士。鷹た近え延友行といつる勇士あり。享年四十二歳不
 て。甯戚管仲にも比ひて可也。また近に次ぐるオムナ。此ハ享年六十一歳。勝たるの翼にもと薦く
 て。寧戚管仲にも比ひて可也。右近ハ五千石。時に松倉右近従重とひす。モ
 見たるの跡にもと。右近ハ七千石。時に松倉右近進出。左近
 に會禪して。今日明智が来使の言詞。家に利あるやうあれども。丈に遠
 て。連人をきをかどる。長久の人かくんや。増々織田家に氏族多く。事
 件をもと難をよし。決して光秀に勧める辭。仰用よと。操る危
 かく。殊處に然ども順慶。三國の地をも與えど。其一言に心迷ふ。要
 時。沈吟の辞。争ひしが。満度の諸士もあくま。ハ利慾もふ惑ふれ。筒
 井家の繁昌。這時。かうと。明智小隊もるの詞を盡し。只願是代勧め
 たり。順慶大に従候。登え秀に勧せんと。商議一決かうと。時代の
 度。よし。詫問。かうと。鷹た近進を出。發よね金力能の條。言ハ通じ背を反と
 す。家國を全す。もれに危ふし。まづ。明智に勧め。と。勧めふと。徒徒まを
 く號す。重地。使者を呼んで。副官。魄など多く納收せ。勧心のす。詫返
 す。而して太八郎を返す。然して后よ松倉右近。鷹小鶴ふと。言ふ。